

第二十三條 謡に寸尺有る事

底本…高知本 対校本…鴻山本

【翻刻】

第二十三 謡に寸尺有事

豎横と申候ハ声に付ての事也。惣して音曲ハ、豎の声ほそくうつくしく、横の声をふとくたしかに謡ふ物也。この豎横と申事、声に有故にて、世間に声あやをなすと①云伝申候。扱寸尺のしさひハ、前の字を長く引は、後の字を②つめて申候。前の字を③よするそならハ、後の字長く引也。是を四寸六寸・六寸四寸の位と、むかしよりの定りにて御座候。文字つもりの心の尺二而候。たとへは六寸と六寸とにうたひ申候へハ、尺にはつれ、あまり申也。音曲もまた、前の文字を引、後の文字をも人におもしろからせんとて、寸法なしに謡ふ時ハ、一尺二寸になりてのひ過、尺にあハすしたるく、もとより拍子程にもはつれ申事にて御座候。又うたひに一字づめ二字つめといふ事も、一字つめて二字のふるを一字つめと申候。二字つめて一字のふるを二字つめと申候。三字皆のふる事、寸はつれとて、むかしより殊之外きらふ事にて候。当代は是程の少の事さへ心を付る人まれに御入候。

【校異】

- ① 云伝申候―云つたへ候 (鴻)
- ② つめて申候―つめ申候 (鴻)
- ③ よするそならハ―よするならハ (鴻)

【現代語訳】

第二十三 謡に長さの決まり事あり

豎横とは声の種類(と使い分け)に関する事柄である。音曲というのは、豎の声であれば喉を緊張させて優美に、横の声の場合は喉を緩めてしつかりとうたうものである。このような豎と横の別が声に備わっていることにより、世間では「声文をなす」(声が様々な情趣を表現する)などと言い伝えているのである。

さて、「寸尺」ということの詳細を語れば、前の文字を長く引いて発声する時は、後の文字は詰めるものである。前の文字を寄せるのであれば、後の文字は長く引かねばならない。これを「四寸六寸・六寸四寸の位」といい、昔からの決まり事である。文字数に決まりがあれば、その文字数から導かれ心中に持つべき決まりの寸法があり、たとえば前の文字を六寸、後の文字も六寸とうたえば、決まりの長さに合わず余ってしまうのである。

音曲も同じことで、前の文字を引いてうただけでなく、後の文字も聞く人に興趣を催させようなどと考えて決まりの寸法を無視してうたえば、(六寸と六寸で)一尺二寸となつて間延びした謡になり、長さの決まりからはずれてだらりとして、本来の拍子の割り付けからはずれてしまう。

また謡に一字詰め・二字詰めというものがあり、前の一字を次の字に寄せ、寄せられた字とそれに続く一字の二

字を延ばしてうたうことを一字詰めという。三字並んだうちの前二字を寄せて、三字目を延ばしてうたうことを二字詰めという。並んだ三字すべてを延ばしてうたうことは「寸はづれ」といって、昔からとてもよくないうたい方とされる。しかし近頃では、この程度の些細な注意点にまで気を配って謡をうたう人はほとんどいない。

【解説】

謡を構成する基本単元である一句八拍の枠組みを常に心の内に持ち、そこから逸脱しないようにうたうことの重要性を述べることを主眼とした一条である。

「謡の寸尺」説は、先行する謡伝書に見える「矩の位」説を踏襲したものである。たとえば『八帖本花伝書』の「矩の位」には、「右の上下の心也。文字移りに、前を長く引は、後を詰むる。前を寄すれば、後を長く引くは、四寸六寸の位と言へり」と、本条と重なる説明がなされる。また説明の最初に「右の上下の心也」とあるのは、同書の前項「一 謡のゆりに上下と云事あり」を受けたもので、その説明には「是、連歌の上の句・下の句の心なり。始めを長くゆり、後を詰むる事、十七字・十四字のつもりなり。惣別、謡は歌道より出たるによりて、諸事に歌を引也。ゆりを十七・十四を合、三十一の数の心をゆると見えたり。あながちに、其数をゆるむるにはなけれども、是、たとへなり」とあり、和歌一首の文字数を例に、長短を加減して「謡のゆり」を決まりの寸法に合わせるべきことが述べられており、それが「矩の位」でも同様だというのである。

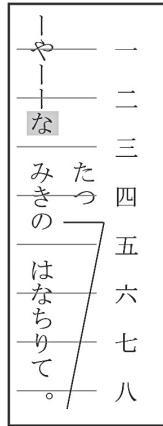
右に続けて本条では、寸尺の心得に関連する「一字詰め」「二字詰め」の技巧に言及する。こちらも先行する諸伝書に見えるところであるが、『うたひ鏡』より後に成立した『音曲玉淵集』には両者の具体例が挙げられているため、参考にそれを一句八拍に割り付けて示す（左図。八ツ割という。観世流現行謡本の節付等を参考にした）。いずれも変則地（四拍で折り返す。トリ地という）の箇所で、上の句が二つに分離しており、それにより次句の上

の句は字数が減少することになる(たとえば《姨捨》では、上の句が「たつや」「なみきの」と分離し、次句の上の句に当たる「なみきの」は四文字)。また、一句のうたい出しの拍は、上の句の字数により決まっており(網掛けの位置)、そこまでの間をつなぐ工夫が必要になる。それを「文字つもりの心の尺」から外れることなく、かつ面白く聞かせるための技巧として示されているのが「一字詰め」「二字詰め」ということになるだろう。

変則地は世阿弥の時代には用いられており、世阿弥自筆能本ではその箇所「延」と記されている。またそれに続けて「ナカム」と書かれる場合もあり、当該箇所がどのようにつながれたのかは明らかではないが、「ナカム」が「一字詰め」「二字詰め」のような引きの技巧であったと見れば、このような謡技巧が教えとして語られていく素地は、かなり古くから存在したということになる。

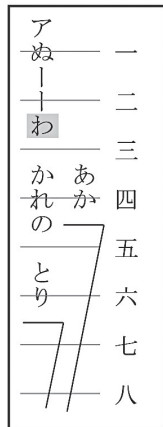
(一字詰め例図)

《姨捨》 なみきの (四) + はなちりて (五)



※た(詰) つー(引) やー(大引)

《三井寺》 わかれの (四) + とりは (三)

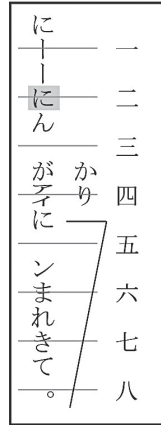


※あ(詰) か(小マワシ) ぬー(大引)

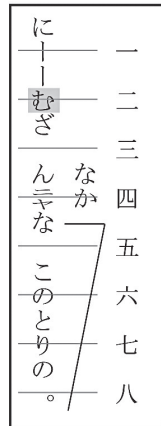
(二字詰め例図)

《楊貴妃》にんがいに (五) ナンまれきて (五)

《善知鳥》むざんやな (五) ナこのとりの (五)



※か(詰)り(詰)にー(大引)



※な(詰)か(詰)にー(大引)

話が前後するが、本条冒頭に声の「横豎」説が置かれている。「横豎」説は早くから能の謡と関連付けて用いられており、世阿弥伝書『音曲口伝』『風曲集』『申楽談儀』などに、声に備わる二種の性質やその発声法の説明に「横豎」の語を用いた言説が見えている。世阿弥説を集約すれば、横の声は「呂・強き音声・出息の扱ひ」であり、豎の声は「律・柔らかに弱き心・入息の色どり」となる。また、横の声と豎の声を巧みに使い分け、さらに横豎を取り混ぜた相音にもうたうことが、謡の声の扱いとして早くから行われていたようである。なお、同一条に記されるものの、「横豎」説が「寸尺」説とどのように関連するのかは不明確である。

【参考・関連資料(抄)】

豎横

『音曲口伝』(日本思想大系『世阿弥禅竹』)

声をつかふ事、其声の向きによるべし。又、気力にもよるべし。横の声をば助けてつかひ、主の声をば押してつかふべし。声につかはれてよき声あり、声をつかひてよき声あるべし。横・主ともにある声を、相音とは申なり。

宵・曉の事。宵に物敷をつかひて、曉はすこし少なくなつかふべし。殊更、横の声などをば、曉には、声につかはれて、声をしたはりて、納め声を本につかふべし。返々、声の向きたると思はん時を失はじとたしなむべし。

一、音曲に、祝言・ばうをくの声の分目を知る事。これは、呂・律二より出たり。呂といふは、喜ぶ声、出る息の声なり。律と云は、悲しむ声、入る息と云り。先、根本を心得べき様、かくのごとし。

祝言の声は、機を体にして、機に声を付て出だす声なり。是、強き音声也。呂の性の性根なり。機を張りて強き声は、息を出だす義にあたるべし。是、呂の声、喜ぶ声なり。しかれば祝言なり。ばうおくの声と云は、声を体にして、機をゆるく持つ。是、柔らかに弱き心なり。機をゆるく持つは、入る息の心なり。是、律の義、あはれなる性根也。然者ばうをくと名付。

『風曲集』（日本思想大系『世阿弥禅竹』）

音声に、横・主の二あり。呂律に取らば、横は呂、主は律なるべきやらん。調子を含んで音取る機は主なり。さて、声を出しすでに歌ふ所は横たり。「横に謡ひて、主に云納めよ」と云り。然れども、調子の出所主なるがゆへに、声出しの文字は主なるべし。さるほどに、主より横へ謡ひ出して、又主に納まる声流なり。横は出息の扱ひ、主は入息の色どりなるべし。此出入の息づかいによりて、声を助け、曲を色どる音感あるべし。又、文字により、声によりて、出息、入息の故実あるべき事、心得べし。是、音曲の命也。「曲道息地」と云り。

又、爰に知るべき事あり。人々生得の音声に、横なるもあり、主なるもあり。横・主足りたるをば相音と云。是、吉声なり。よき声をば、声のまゝに、さし声より甲の物などまで云渡して、さて、下て云流す声がかりを、主の声に、入息の響きに云納むべし。是は、相音・上声にての曲道也。又、生得横の声のみならば、少し主の声がかりに、息を詰めて謡ひ渡すべし。是、相音の曲聞を色どる故実なり。又、主の声のみならば、横の声がかりに、息をゆるくと出して謡ひ渡すべし。甲は遣る声の位、乙は持つ声の位なり。遣る声は、声出しは横にて、遣り詰むる所、主の正根あり。心得べし。如此、声によりて扱い色どるを、声をよくつかふとは申なり。是、上手の位なるべし。我声の正体をば分別せずして、只、声を色どり、曲をなさんは、音曲正路にはあるまじきなり。

『申楽談儀』（日本思想大系『世阿弥禅竹』）

「横の声を主に謡ふことは、せめて易くやあらん。主の声を横に謡ふべきこと、いかゞ」と尋ねければ、主の声を横の聲がかりに謡ひ成事は、調子を低々として謡ふべし。横、主の二のvariety目も、わが声の変わる時を心得て、言ひ渡すべし。たとへば、鎌倉声の、事によつて、正直に成時の有がごとし。

『五音曲条々』（日本思想大系『世阿弥禅竹』）

一、音曲習道ノ次第ト者、音声ノ下地ハ仕声也。声ヲヨクツカイテ、曲ヲナスニシタガテ、タトイ不足ナル声ナリトモ、ツカイ足りテ、ナニトモ心ノ俣ナル声位ニナラズバ、ウルワシキ音曲ノ上果ニハ成マジキ也。サルホドニ、仕声ヲ以テ音曲ノ下地トス。サテ、節ヲヨクく師ニ習イテ、ソノ形木ニ入フシテ習得スベシ。コノ位モ、イマダ初心ノ分也。其後、声ノ横・主ヲ心得テ、文字ニヨリテ、横ニアタルベキ声ヲバ横ニアタリ、主ニアタルベキヲバ主ニアタリテ、相音ニ謡ウベキヲバ地声ニシテ、次第梯登ニ、習道ノ稽古ニ至ルベシ。習道ト者是マデ也。此上ハ不伝ノ曲分也。

『八帖本花伝書』三（日本思想大系『古代中世芸術論』）

わうじゆの字は、わうは横也、じゆの字は豎なり。されば、彼二字、心持肝要也。横の声をば太く、豎の声をば細く、謡候也。かくのごとく謡候へば、声を助け、息を助け候なり。此横豎の心にて、何れの謡にも尤なり。

『音曲玉淵集』三「一 声の横豎の事」（昭和五十年臨川書店復刻刊）

一人うたふ時は豎の声をつかふて幅せばからぬやうに謡へし。同音の所は横の声を専らに諷ふへし。豎の声はかりにては同音そろはぬものなり。

『同右』三「一 横豎之事 経緯トモ」

此横豎の事は音曲の上にて尤委しく吟味すへき事なり。謡の拍子有所はいふに及はず、詞・問答・文・くどき、全体の文句に悉く有。其外、笛・鼓・太鼓等にも各備はり有事にて、此一道首尾始末、横豎のはつる、事はなし。本より天地の間に物とし

て横堅なき事なき道理なれば、珍らしからぬ事也。たとへは正直といふも正は横、直は堅なり。たてよこ偏らぬを正直といふか如し。扱、謡曲の上に付ていはゞ、

堅 大鼓 横 小鼓

りくそういまた

あけざるに

ふしなき時の陰陽なり

陰 陽

音声ノ堅

音声ノ横

りくそういまた

あけざるに

是は曲舞か、りの音声なり

たかひにかけを

みつか、み

おもてをならへ

そてをかけ

陽 陰

甲 上音 ハル

乙 下音 メル

超 ウク

伏 シツム

右の通りにて、是をはた物にたとふれば、堅糸は台にはりてかけ置、横糸は梭にて運動す。うたひは文字を堅にし、ふしを横糸にして、是を織たつるは即ち音声なり。織やう或ははり過、或はたるみあれば、地村ありて染色まで悪し。諷も其如く宛角むらなきを肝要とす。それ故、大鼓の間をおもきやうに諷ふと教ゆるは、堅の間はハルふし多くはしり安き故に是を抑ゆる心なり。小鼓の間を軽きやうにと教ゆるは、横の間は下のふし多く居つき安き故に是を引立てる心なり。惣して文句・拍子の陰へは音声の陽を付テ、文句・拍子の陽へは音声の陰を合す。是曲舞か、りにて、陰陽和合し、文句・ふしの糸を音声村なく織出せるなり。陽中の陰、陰中の陽と論し、又ハルはメル、乙は甲とをしゆるも皆此道理也。勿論拍子の所はかりにあらず、或はふみ・くどきなどのごとき、音声の伏て居つき安き所にては起してハル氣をふくみ、或は上端又クルふしなどの甲音にのほりやすき所にては乙の抑ゆる心を持て謡はしむる、皆此故なり。又曰、文字の大き成をきらひ、長きを嫌ふも是皆文字のしまらぬ故なり。しまらぬ文字は浮、是衣織手の下手也(文字の長きも息のたるむ故なり。うたひ出しは猶以長きを嫌ふ。但のる所

は各別)。但ふしにて持引は各別にて、又うくふしは有事也。是は謡の紋とも成所有。惣して諷ふ内に文字ヲ專にうたふ所とふいしを專に謡ふ所のわかちを弁ふへし。

たとへは絹布を織に、経の糸より緯の糸はおもめ輕し。経緯同しおもめにて織時は、ぬきかちて地あひそろはず。謡ひの文句七五の文字の内、七文字を大鼓の間に付合、五文字を小鼓の間に付る事、尤至極、是にて陰陽たてぬきのわかち分明に知へし。

声あやをなす

『音曲口伝』(日本思想大系『世阿弥禅竹』)

毛詩云、

情發於声、声成文、謂之音。

『八帖本花伝書』三(日本思想大系『古代中世芸術論』)

又、声、文をなすと言ふ事あり。これも横堅なり。その謂は、声の色をもつて、謡に文を付くるなり。織物、織筋は色々の色を織る物なり。あやの文と言ふ、白き上に文を織り、淺黄の上と同じ淺黄にて文を織り、唐茶の色にてまた其上に、同じ色にて紋を付くりたれば、此謡も、同声を二つに分けて、堅・横を謡ひ候へば、文を付くる故に、声文をなすと言へり。

四寸六寸・六寸四寸の位

『八帖本花伝書』三(日本思想大系『古代中世芸術論』)

一 節に矩の位といふ事有。右の上下の心也。文字移りに、前を長く引は、後を詰むる。前を寄すれば、後を長く引くは、四寸六寸の位と言へり。これは、字積りの、心の矩なるによりて、矩の位と云。例へば、六寸と六寸と合はせ候へば、尺に外れ候。謡も前を引き、又、面白がらせて後をも引ば、六寸と六寸に成候て、謡しだるし。此、用心の矩也。然によりて、六寸四寸に謡候へば、尺に合ふ也。かるが故によつてなり。長きを陽とし、短きを陰と定め、陰陽和合の心なり。例へば、春の日長ければ、冬の日短し。世間も一年の内に、長き季と短き季と合はせて、陰陽和合と見えたり。又曰く、此節を長短の節とも云也。

『音曲玉淵集』三「一 矩の位の事」(昭和五十年臨川書店復刻刊)

第一文字を双へ平等には謡はぬ事なり。又前の字を伸れは後の字をひろひ、又前の字を拾へは後の字を伸るなり。是を四寸六寸とも六寸四寸の位とも、昔よりの定格也。是を長短のふしともいひて、文字つもりの心の矩也。人に面白からせんとて、前の字を伸て、又後の字をも寸法なしにのぶれば、一尺二寸になりて伸過、尺にあはずしたるく、もとより程拍子にもはつる、なり。

一字つめ二字つめ

『八帖本花伝書』三(日本思想大系『古代中世芸術論』)

一 謡に一字詰め・二字詰めと言ふ事は、一字詰めて二字延ぶるを一字詰めと云。又、二字詰めて一字延ぶるを二字詰めと言へり。三ながら延ぶる事、寸に延び、心の矩に外る、により、謡しだるし。返すぐ嫌ふ也。

『音曲玉淵集』五「一 一字つめ二字つめの事」(昭和五十年臨川書店復刻刊)

花伝書二、一字つめて二字伸るを一字つめといひ、二字つめて一字伸るを二字つめといふ。三字なからのふる事、寸に伸過、心の矩にはつれ、諷したるし。嫌ふ事なり。

楊(楊貴妃) △^{ツムル引}かりに人界に

ウトフ △^{ツムル引}中にむさんやな

是は二字つめ也。但、かりトよするには非ス。一字引て拍子ニ持合ス。

姥(姨捨) △^{ツムル持引}たつやなみ木の

三(三井寺) △^{ツムル引}あかぬわかれの鳥は

是は一字詰也。但、たつトヨスルニ非ス。つノ字ヲ少持、やノ字ヲ引て拍子ニ持合ス。

又、句切のいひはなしに二字詰といふ事有。

千（千手） △今はあつさ弓。よしちからなし重ひらも
是も弓トよするには非ス。弓ノミ、重衡もノも、息の余らぬ様につめて、
句を切、次へうつる也。但、弓トいふ所のチホに
少味ひ有。

（恵阪悟）

